



こーひーぶれいく

## 私と釣りとT君

市川 英明

Ichikawa Hideaki

小学生の頃から魚を捕まえるのが好きだった。捕獲した魚は大抵、家で飼育した。最初は水の中に入って「四つ手網」という網で捕っていたが大人が釣りをしている仕草を真似て自作の竹竿でやってみたらそこそこ釣れた。網より数ランク上の行動に思えた。手作りの竿と自転車を武器に練馬から埼玉にかけての沼や川のあらゆる所に行った。そういうことが好きな友達も何人かいた。釣れた魚は大事に扱って家で飼育することが主たる目的だった。

昭和43年、中学で千葉に転校し海が近くなった。昭和40年代前半の海は今より汚れていたがそれでもハゼやセイゴが少しは釣れた。T君と知り合ったのもこの頃だ。T君の釣りに対する熱意と知識は生半可ではなく、私も釣りに対して勘だけではなく、理屈で考えることを学んだ。また、飼育は止め、釣ったものは必ず食べて魚を成仏させるという変化も生まれた。

高校に入ると多少値の張る道具も手にすることができ、もう半分大人ということで許される行動範囲も格段に広がった。西は伊豆、東は茨城、南は房総館山（北はあまり行かなかった）。

海ではハゼ、シロギス、カレイ、川ではハヤ、ヤマベが中心だった。

土曜まで学校がある時期によくあんなに遠くまで行ったのが、今、思うとあきれかえる。

T君は別の高校に行ったが、常に同行者の中にいた。生涯で一番釣りに行ったのは高校3年の時だ。勉強しなければいけないという気持ちはあるものの全くやる気がでないという誰にでも覚えのある気分が余計、釣りにかりたてた。

特に高校3年の秋はほとんど毎週行っていた。

こんなことをしてはいけない。でも楽しい、というジリジリ感とかヒリヒリ感を今でも鮮明に思い出す。この頃、釣りの本当の面白さが身にしみた気がする。何人かいた同行者はT君だけになっていた。

昭和49年、予定どおり浪人の身となり、釣りを封印した。翌年、晴れて大学生となったが、あまりにも楽しいことが多く本格的に釣りを再開することはなかった（T君は2浪目に突入し、さすがに誘いも誘われもしなかった）。

大学では釣りはたまにやる遊びの1つとなり、他の様々な遊びで充実した？4年間を過ごした。というわけで「釣りキチガイ」状態での釣りとの係りは高校で終了する。

社会人になってからは常に職場に一定程度、釣りをやる仲間がいて、改めて釣りの楽しさを認識し、時間の許す範囲で行っている。高校時代のヒリヒリ感はないが、まさに楽しい息抜きとなり、人生に彩りを与えてくれている。

最近は船で海に行くことが多く釣った魚を家族で食すのも大いな楽しみになっている（見よう見まねでやっているうちに結構、魚さばきも上手になった）。

釣ったばかりのシロギス、アナゴ、アジ、サバ、メバル、カサゴたまにタイ、ヒラメなどはお店で買うものとは全く別種の何とも言えない甘味があり、釣り人とその周辺だけの特権だ。

T君とは長らく音信普通になっていたが、15年ほど前に共通の友人A君の仲介で再会した。彼はセールスエンジニアとなっていたが、同時に釣りの世界ではかなり有名になっていて、釣りの新聞に載ったり、仕事のかたわら、釣り具メーカーのアドバイザーをしたりしていた。

釣りのレベルはとてつもない差がついたが再会の2週間後に2人だけで釣りに行った。久しぶりという感じが全くしなかった。その後も年に2、3回釣りに付き合ってくれる。釣りの回数以上に酒も飲む。高校3年の時の釣行は一生の楽しい趣味と大切な友人を僕に与えてくれた。若い時に多少の無茶をやってみるのも悪くはない。

（公益社団法人日本アイソトープ協会）